
世界って広いんだね

椰代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界って広いんだね

【Nコード】

N0686Z

【作者名】

椰代

【あらすじ】

女子高校生なうゝなあたしは模試の当日に寝坊。前日の夜中に「寝坊したら奢ってね」と弟に言われていたのに（略）。気持ちを切り替えて車内勉強するあたしに襲いかかってきたのは睡魔、という名のプロローグでした。

あたしの560円(前書き)

この小説に興味を持っただけであリがとう。
嬉しいです。異世界トリップって魅力的ですよね！
よろしく願ひします

あたしの560円

「蒼^{あお}っ！！起きなさい！！遅刻するわよ！！」

―ある秋晴れの朝。

あたしはいつもどおり母に布団をはぐられ、自分の温もりから引き離された。

「いつまで寝てるの！！早く立つ！！起きるっ！顔洗う！！」

ああ・・・うるさい。低血圧のあたしの頭には母さんの甲高い声に顔を思いつきりしかめた。

言い返そうとしてふとデジタル時計を見、次の瞬間母さんが顔をしかめた。

「は、8時？！」

「だからさつきから言ってるじゃない！遅刻するのよ貴方！急ぎなさいね」

と言つて、ぱたぱたと部屋を出て行った。

・・・やばい。今日は朝から模試なのに。あたしは頭をフル回転させた。

テストは9時から。学校まで30分。テスト15分前に着席完了。だから準備時間、10分以内。

考えながら制服に腕を通しスカートのホックを留めてかばんを抱えて家を飛び出した。

駅のホームまで猛ダッシュしたが、行ってしまったばかりなのか。

エントランスの最前列に並べた。ケータイで時間を確認すると、予想より一本早い電車に乗ることができようだ。

よかった、遅刻はなんとか免れそう。まだ寝癖が収まりきっていない髪の毛をしばらく撫で付けながら思っていると、電車の到着するときのメロディーが流れた。

扉が開いて、乗客が雪崩のように降車する。あたしが乗車する頃には、珍しく乗車シートに座れた。

ああ、間に合ってよかった。今日は（寝坊して）ついてないけど、（遅刻免れるから）ついてる。

何気なくケータイを開くと新着メールがあつた。弟から。

『寝坊 乙。そうそう俺、購買のパンセット（560円）ね？』

「・・・」

そう言えば昨日、というか今日の夜中に「蒼いつまで起きてんの？また明日たたき起こされんぞ」と寝坊ゼロの弟にニヤ顔で言われたので「そんなことする訳ないじゃん」と反論して、「じゃあ賭けようか。蒼寝坊したら奢れよ」と言われ「あたしパンセット（560円）ね」と乗ってしまったんだ。・・・なんてこった。あたしの買い食い費が弟に・・・勉強って延長するもんじゃないわ。

とりあえず電車独特の走行音を聞きながら学校最寄駅に着くまでの間、かばんから英単語帳を出して、テスト対策に集中することにした。だがしかし。

ね、眠気到来・・・！！

数十分前まで寝ていたにも関わらず眠い。何故かとにかく眠い。

頭を軽く振りなんとか紛らわそうと瞬きもする。でも眠い。

馴れないことするもんじゃないか。どうせ終点だし、寝てしまおう。

潔く折れたあたしは、単語帳を閉まってかばんに顔を埋めた。

あたしを呼ぶ声（前書き）

あたしを呼ぶ声

心地よい風があたしの体を撫ぜる。自分の体が湿った土の上に横たわっている感覚。

あれ・・・？あたしは電車のシートで寝てるんだよね。何故に土・・・？

くわつと目を開けば。

「・・・どこじゃらほい」

——あたしの知らない森。そしてあたしは土の上。

自分、こんな場所で何してるんでしょう。何で森！電車どこだ！模試はどうする！パンセット売り切れる！！てかどこだここ、もうやだ現実逃避したい。

「・・・とりあえず誰かに連絡しとこう」

それから2時間ほどだと思う。あたしはやつと気づかされた。持っていたはずのケータイはかばんを探しても制服を探しても、どこにもない。

何でないんだ。これじゃあ助けが呼べないじゃない。

ということであの岩場に留まっているよりも、自分の勘を信じて助けを求めることにした。

日本でいう春の午後3時くらい、だろうか。森は太陽の陽気を

十分に蓄えているせいかぽかぽかとして暖かい。きらきらとした木漏れ日に癒されながら歩き続けた。

けれどもあたしは女子高生。馴れない森を歩き続けるスタミナは限られている。時間は待つてくれない。気がつけば太陽はゆっくり傾いてきていた。肌で感じる風も冷たい。もうかなり歩いたはずなのに人も、鳥も見当たらない。太陽は沈む手前。

どうして誰もいないのか。急に大きな不安と寂しさかが押し寄せてきた。

「・・・っ」

あたしの体は長時間馴れない森を歩き続けた疲れからか、細い木の根に足を引っ掛けて少しひざをすりむいてしまった。立ち上がって、汚れを落す気にもなれなくて。その場にしゃがみこみうずくまった。さつきとは違った、夜の風があたしの体温を奪っていく。

”蒼”

誰かが自分を呼んだような気がしたのと同時に、家に着いたときのような、安心感が体を包み込んだ。あたしが顔を上げると、

「……。」

目の前に狼に似た真つ白の動物がじつとあたしを見つめていたの
で驚いた。いつの間に……

”蒼”

また、聴こえた。さっきと同じ声だ。

耳から入ってくる声でなく、頭に直接響く声。少し弟の空の声に
似ている気がした。

あたしは試しに、どうすれば帰れるか、と単刀直入に問いかけた。

”……彼について行けばいい”

間を置いて声の主から返事があった。

わかりました、と返事をし、次いで目の前の白い狼と目を合わせる。

狼はあたしの目を見るとぱちつと瞬きをしてから、くるりと背を
向けて歩き出した。

悪い感じはこれっぽちも感じない。あたしは迷わずその背中につ
いていった。

あたしを呼ぶ声（後書き）

ありがとうございました。

よければ感想、聞かせてください（＾ω＾）

声の主は予想外（前書き）

私も予想外です。

声の主は予想外

辺りはすっかり暗く静まり返っている。でも、白い狼を見失ってしまうことは1度もなかった。

ところでこの案内役、狼って言っちゃっていいんだろうか。それはもう真っ白なすんなばらしいキューティクルの毛並み。馬くらいの大きさに、ふっさふさのしっぽが何故か2本。

うん、わかりやすく例えるとジ。リのヤマイヌさん。実は彼も山の主だったりして。

歩くたびに揺れるしっぽを見てみると、心が和む。でも、しっぽが2本もある大きい狼なんて、DVDでしか見たことがない。いるはずもない。今思い返せば、今から会う声の主も謎だ。そもそもあたしはいつテレパシー能力に目覚めたんでしょう。顔も知らない誰かと普通に会話しちゃったけどさ。

「。。。。」

そこまで行き着いてあたしは考えるのを止めた。だって今から会える声の主は、きっとあたしのことを知ってる。あたしが電車に乗っていて、こんな状況になっちゃったミステリーも知ってる。というか、もしかすると関係者かもしれない。何はともあれ会ったら全部聞き出そう。

すると森がひらけて大きな湖が見えてきた。月は出ていない。星が、輝いている。あたしには大地が煌めいて見えた。なんて神秘的なんだろう。足を運ぶのも忘れてあたしは立ち尽くした。

案内役は湖の傍まで行つて、後ろのあたしに向き直つた。じつとこちらを見つめてくる。

こつちだよと言われたような気がしたから、あたしも彼の隣まで歩み寄つた。

「うわぁ・・・！ 綺麗・・・！！」

宝石がちりばめられた水面を覗き込むようにしてかがむと。

「蒼。待っていたよ」

「えっ！？わっ・・・と！」

突然傍で生身の声がしたので驚いて体勢を崩してしまった。

湖に落ちる！と目を瞑ったけど、ぐいっとな強い力で引き上げられる。

「危ない危ない」

苦笑が混じつた声の主の声。あたしが恐る恐る顔を上げると。

「・・・（う、わあ、綺麗）」

動揺で声がでなかった。若い青年だ。弟に似ている、気がする。でもあたしが一番目を惹かれたのは翡翠色の目。日本人をやってるあたしにはもちろん縁がない色で。そもそも外国人で翡翠色の目の人なんているんだろうか。

いやいや。見惚れてる場合じゃないよ自分。この人には聞きたいことがたくさんあるんだから。

「ということで、ここ何処ですか？あたしを地球、日本に返してください」

と目を見て単刀直入に聞いた。大丈夫。この人には全部わかってる。たぶんだけど。今は初めてのアローンサバイバルで極度のホームシックなんだ。言葉足らずは堪忍してください。後はもう今すぐ家に帰りたいです。

声の主はというと、あたしと目が合った数秒間、目を見開いて硬直していた。そして次の瞬間、くすりと声を出して笑った。

「・・・何がおかしいんですか」

疲れていて早く返りたいあたしは声の主を睨んだ。

「ここが君のいた世界じゃないってことはもうわかってるんだね。悪いが蒼を元の世界には返せない。蒼、君は元の世界では他界しているんだよ」

「え・・・？」

「君は朝、寝坊して遅刻しそうになって電車で乗った。その電車が事故に遭ったんだ」

「・・・」

「・・・。おいで。見てご覧」

青年は湖に近寄って、水面に片手をかざした。すると水面に家族が映る。父さん、母さん、友人達。皆が喪服を着て順番に手を合わせていた。弟は見当たらなかった。そして祭壇の上には、あたしの笑う写真。

「君は本来、命の流れにしたがって他の命たちと川を廻る筈だったんだけどね・・・」

俺がたまたま見つけたんだよ。だから捕まえて連れてきたんだ。

「

「・・・どういうこと？」

青年の説明曰く、命は廻り、ある一定の周期になると、どこかの世界に根付くらしい。

そしてあたしはあの電車で死んだ後その周期に乗って廻り始めるところを、この人に捕獲された、らしい。まさか自分が他界している

っていうのは予想外。この人に連れてこられたっていうのも予想外。もうどうでもいい。全てが予想外なんだもん。

「蒼、この世界で生きてみる気はない？」

青年は真剣な目であたしに言った。何かあるのかと思ってあたしも真剣に返した。

「・・・あたしに何か役目があるんですか？」

「え？役目なんてないよ。俺のわがままだし」

「・・・え？」

さらっと言った。今この人さらっと言ったよ！わがままって！わがままって何！！

動揺が顔に出たのか否か、青年は宥めるようにこう続けた。

「ここは俺の世界。蒼に行つて欲しい世界ってここじゃなくて、俺が神様の世界なんだよ。」

「・・・待て待て待て。それどんな神！」

うん、あんたが神様？信じらんねえですよあたしは。どんな世界だよ。

あたしの動揺に対して青年は笑顔で答える。この笑みは、

「いやだなあ蒼。行けばわかるよ行けば。そう、行ってみなくちゃわからない」

何かを含ませて言う青年の顔はもはや神と思えず。弟外国バージヨンに見えてしまう。

うん、青年のそれは、弟のシニカルな空にそっくりで。

「君は俺の波長とすごく相性がいいんだよ。これも何かの縁と思っでさ」

青年は呆然とするあたしを見て、面白いのか何なのか。とにかく笑いが止まらないらしい。ツボに入ると中々抜け出せないところもそっくりである。ますます弟に見える。

「ふ．．．ははっ！ダメだもう俺もう説明無理」とりあえず俺の世界に行ってみようか？

ああ．．．嫌なんて言わせないよ。俺と相性の合う魂なんてもう随分合っでないんだから」

後半から青年の言葉は急に冷静さが入っていた。目がなんていうか．．．獣．．．？

何かの危険を感じて後ずさるには遅かった。

「．．．！！」

はっと気づいたときには腕を引き寄せられ、腰に手を回され、顎先をつかまれ顔を持ち上げられていた．．．何この恋人的状況。

「はあ、鈍いなあ、ちゃんと警戒してよね．．．蒼姉さん？」

「え?! って空?! な．．．んっ」

確認する前に唇を重ねられてしまった。

そこから何か、大きな力のようなものと、空が神であろう国に関するであろう歴史、知識、全てが鮮やかに流れ込んできた。あたしはそれに驚いて、手で押し返そうとしたがやんわりと止められた。そして大量の情報に頭痛がしてきた。

あたしは、意識を手放した。

声の主は予想外（後書き）

どうしようすごく予想外に・・・！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0686z/>

世界って広いんだね

2011年12月2日21時52分発行